
元錬金術士、二度目を経験する

夏月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

元錬金術士、二度目を経験する

【Nコード】

N5529X

【作者名】

夏月

【あらすじ】

とある転生者の工房物語の主人公が、二度目の転生でポケモン世界に。

フレイが繰り広げるとたばたラブコメディー（予定）。

レッシリトライ(前書き)

フレイのアトリエシリーズではありますが、アトリエ要素はほぼ皆無です。

レッツリトライ

アトリエ世界で面白おかしく暮らして、死んだらまた新たに生まれ変わりました。

「ばぶー」

再び幼児プレイですね。

ええ、分かります。またおしめとミルクの生活なんですね。

それにしても、よもや餅を喉に詰まらせて死ぬとは思わなかったわ。探し回ってようやく米を発見して、うきうきして食べて、食感もち米に近かったから餅にしてみても食べてみたら、喉に詰まったとか何よそれと言いたい。

「ばぶぶ（もうちょっと小さめに餅を作るんだっ）」

完全に私のミスです。

しかも、妖精は全て採取でいなかったし、イヴァンとアスランもそれぞれの仕事で留守。

よーするに助ける人が誰もいなかった。

そして、私は死んで今の状態となった。

現在、私は祖母の手に抱かれて葬式に出席中だ。

棺桶に入っているのは、この体の父親。ようするに、生まれ変わった私の父親だ。

どうも、この世界でも私は父親運は無いらしい。

母親は、棺桶にすがり付いて号泣している。

ちなみに、死因は交通事故らしい。

まあ、よくある死因でした。

頭を打ったのが原因らしく、遺体がキレイなままだったのが不幸中の幸いか。

葬式に出席している人の、憐憫の視線を浴びせながら葬式進み、一週間後。

私は祖母と共に暮らすことが決定されていました。

母親はどういも心因的に無理だったみたい。

父親を愛しすぎて、父親に似ている私を見るだけで辛くなるらしい。だから、立ち直るまで私を祖母に預けるようにしたらしい。

つーか、祖母がそう決めた。

祖母と言っても母方の祖母ではない。葬式での主賓オイの母親の方だ。

「あの人に任せたら、ゴミ溜めの中で生活させかねないからねえ……」

とは祖母の言だ。

祖母の住まいは今まで私が住んでいたライモンシティから遠く離れた地だった。

どれぐらい遠くかと言うと、主要都市間を電車で？いでいるイッシユ地方において、丸二日かかるのだ。

まあ、乗り換えとなにより駅から丸一日移動しなければ着かないと言うのがネックになっている。

この大陸、と言うよりこの世界は実は車があまり普及していない。電車なんてリニアモーターカーなんて言うハイテクな代物なのにね。

「サクラ、そろそろ着くからね」

祖母が腕の中の私にそう言って笑いかけた。

「メブキジカ、スピードを緩めてちょうだい」

祖母がそう乗っていたポケモンに向かって言った。

そう、ポケモン。

この世界は、ポケットモンスターと言う不思議な動物と共存を果たした世界だったのだ。

正直、ポケモンなんて一番有名なピカチュウぐらいしか知らなかった私は、祖母が駅で取り出したモンスターボールに度肝を抜かれた。

いや、なんか不思議な生き物が多い世界だなとは思っていましたが、まさかポケモンだったなんて思いもよらなかった。

だって、ポケモンって種類が無茶苦茶多いのだ。全部覚えていく訳が無い。

祖母が、赤と白が特徴のポケモンボールを出して初めて気付いたよ。

祖母と共にメブキジカから降りた場所には、一軒のこじんまりとした家があった。

屋根は赤い屋根でとてもキュートな家だ。

ただし、お隣までは死ぬほど遠い。つか、目視できない。

「今日から、ここがあなたの家よ。サクラ」

フレイ・ローゼン改めタナカ・サクラ。
ポケモン世界で生きる事になりました。

楽園

私に移り住んだ集落（と言ってもお隣なんて目では見えない）の近くには森がある。

いや、正確には森の中に家があるのだ。

この世界は、ポケモンとの共存が基本的な事らしく、極力環境破壊をしないように気をつけているらしい。

さて、その森だがどうも自然環境が虫ポケモンに最適らしく、イツシユ地方の全ての虫ポケモンが存在するある意味虫ポケモンの楽園だった。

「サクラ、この子はアイアント。私のポケモンよ」

だから、祖母の……いやばーちゃんのポケモンも当然の事ながら虫ポケモンがメインだった。

ガチガチと上顎を鳴らすアリ型のポケモンを見て、私は思わず固まった。

分かってはいた、理解はしていた。けど、デカイ。

そう、ポケモンは私の常識内にある一般的なアリよりかなり大きいのだ。

それは、他のポケモンでも言える事なのだが。

例えば、さつき木の枝にいたクルミルも私が知っている青虫より大きかった。

多少顔が可愛かろうが虫は虫。

思わず生理的嫌悪感が先に立つ。

引きつった顔でアイアントを凝視している私に気付いたのか、ばーちゃんが心配そうに顔を覗き込む。

「怖いのか？ 大丈夫よ。この子は、私と長い間共に過ごしているし、なにより性格もいいし」

性格云々より、虫である事自体が駄目なですよ、ばーちゃん。

「あら、アイアントもサクラに興味があるみたいよ」

そう言っつて、ばーちゃんはアイアントの背中に私を乗せた。

「びゃああああああん！」

不安定なグラグラとした背中と、なにより苦手な虫の上に乗せられ私は思わず泣き出した。

これぞ、赤ん坊の特権。

オムツを替えてもらうと言う羞恥プレイはイヤだが、嫌な事は泣けば済むのはありがたい。

二回目でも、正直大人の意識があるのにオムツ替えは恥ずかしいですよー。

ミルクは、幸いにも哺乳瓶だったので大して困る事は無かったんですけど。

フレイの時は、ミルクの時も困ったよなあ…。けど、食べないと死ぬ訳だし。

必死に自分を納得させて、摂取しておりました。

「あらあら」

アイアントが突然泣き出した私を乗せて、おろおろとする。

すると、何処にいたのか木の上にはいたクルマユが糸を吐き出し、私をぐるぐる巻きにする。

そして持ち上げようとした瞬間、

『ガチャガチャ！』

と、私を奪い取られようとするアイアントが抗議の声をあげ、ハサミを繰り出し糸を切断する。

「ほぎゃあああああ」

中途半端に持ち上げられて、落下する私を素早く下に回りこみ受け取るアイアント。

こわっ、ものつすごく怖い！

お互い威嚇音なのか、それを出しながら相対するアイアントとクルマユ。

そんな二匹のポケモンを眺めながら、ばーちゃんはあらあらと笑いながら眺める。

どうでもいいけど、頼む助けてくれ……。

思わず、アトリエの世界は天国だったと思ってしまう私だった。

虫が苦手なのに、虫の楽園と言うような場所に住まないといけないなんてなんて罰ゲーム！

楽園の日常

私は大きな鍋に入れた、調合済みポケモンフードを小さな体でえっちらおっちらと庭に運んでいく。

前方にはばーちゃんの手持ちのポケモンの他に、楽園から遊びに来た虫ポケモンたちがいる。

「また増えてるよ…」

顔を引きつらせて、少し離れた場所に置いてある餌入れにみんなの餌を入れていく。

多目に作ってきてきて正解だったわあ…。

ガチャガチャだの色々な虫の鳴き声を聞きながら用意を終えると、一気に走って距離を取る。

すると、虫ポケモンたちが慣れた様に食事を始める。

「やれやれ…」

肩をぐるぐる回して、固まった肩をほぐす。

10分もすれば食事も終わるだろう。それが終わったら片付けて、自分達の食事だ。

アイアントが食べた順に、虫ポケモンたちを餌入れから離れさせていく。

「いつもありがとうね、アイアント」

私の感謝の言葉に、アイアントはガチャガチャと鳴いて応じてくれ

た。

このアイアントは、私が始めてこの家に来たときのアイアントだ。

ばーちゃんが仕事でいつも忙しい場合は、この子やばーちゃんの手持ちポケモンが私の面倒を見てくれた。

おかげで、ばーちゃんの手持ちだけは少しは慣れた。

この子の子供達はいまだに慣れなくて、近づくとたびに悲鳴をあげているけど。

けど、よくよく考えたらシユールな光景だったと思う。

ハイハイで逃げる私の後を付いていくアイアント。

はたから見たら、捕食される図じゃねーの？と思わないこともない。

「それにしても、ばーちゃんはまだ仕事か。ポケモン研究も大変だねえ……」

大分育つてから初めて知ったのだが、ばーちゃんは虫ポケモンの研究者だった。

だから、こんな辺境の地に家を構えている。

そして、ご近所さん（むちゃくちや離れていて、家の影も木に隠れて見えないが）も虫ポケモンを研究している人々ばかりだ。

アイアントは大分慣れたけど、虫のどこがいいのか分からないなあ。ポフィン作りは面白いと思うけどさー。

「今日は少し寒いから、温かい物にしようかなあ……」

庭から戻ってくる私の後をつけてくるアイアント。

私はアイアントの体を感謝の意をこめておそるおそる撫でてやる。

近くに居るのは大分慣れたけど、触るのはまだまだ怖い。

つーか、この世界に来てから虫はもつと怖くなった。だって……。

「ぐえっつ」

上から何か落下してきて、私の背中に張り付いた。こ、腰がああああああ。

ガチャガチャと隣に居たアイアントが何かを言ってくれる。

「……………クルミル、突然上から落下するのは勘弁してよ……」

これもまたばーちゃんの手持ちポケモンの一つのクルミルだ。

この子はまだこーやって抱きついてくるだけだが、野性の虫ポケモンはどいつもこいつも私を自分達の巣にお持ち帰りしようとする。

ばーちゃんは、「好かれているわねえ」と一番最初の時と変わらない感じで言うけど、こっちは死活問題だった。

だって、庭で寝ていたらいつの間にか森の中とか、森を歩いていたらそのまんま捕獲されてお持ち帰りとか、ザラだったのだ。

その度にはーちゃんの手持ちポケモンが総動員で助けに来てくれた。

最近慣れたもので、捕獲されそうになるとさっさと逃げるようにしている。

ちなみに、虫ポケモン以外はこんな事は起こらない。

あくまで、虫ポケモンだけだ。

「サクラは、虫ポケモンのトレーナーに向いているわねえ」

とはばーちゃんという言葉だが、私はばーちゃんの手持ち以外の虫ポケモンと親しくする気なんてさらさらない。
むしろ、近づかれるだけで逃げ出す。

こうして、私は『楽園』の中にある小さな箱庭のような家で、穏やかに暮らしていた。

あの日までは。

楽園の終わり

ザーザーと雨の音が煩かった。

坊主の読経の声と、線香の匂い。

冷たいアイアントの表皮が、私がコレが現実であると意識させる。

私の横には、『母さん』が居た。

冬の少し冷え込んだある日、食事の準備が出来てばーちゃんを呼びに行ったら、床にばーちゃんが倒れていた。

その体は冷たく、呼吸はなく、私は慌てて医者を呼び、そして確認された。

ばーちゃんの『死』が。

葬儀が終わり、小さな骨壺に入れられたばーちゃんを前に、『母さん』は言った。

「ライモンシテイで一緒に暮らそう」

って。

私は、ばーちゃんの葬儀が終わったところで一人で暮らす気満々だった。

ばーちゃんも、それを望んでいたし、そーなる為に必要な金銭的な問題も解決してくれていた。

自分の研究によって定期的に得られるお金を、全て私に残してくれたのだ。

贅沢さえしなれば、私が一生ここで、ばーちゃんの残されたポケモン達と暮らしていくには十分なお金。

教育は、通信教育で受けているので、問題はない。

『母さん』が頷いてくれたならば。

親権と言うものがある。

未成年の子供は、保護者の保護の下で健やかに育つ為の権利。

ばーちゃんが生きている間は、ばーちゃんがソレを持っていた。

けれど、ばーちゃんが亡くなった今、ソレは『母さん』へと移った。

そして、親権を持つ『母さん』は、私と一緒に暮らす事を望んだ。

この年にもなつて、泣いて喚いて、転げまわって私は嫌がった。

さすがに、転げまわって泣き喚くのは少々恥ずかしかった。

でも、それ以上にこの『楽園』と言う名の『箱庭』から出て行くのがイヤだった。

けど、結局それを承諾したのは、ポケモン達のおかげだった。

アイアントが、クルミルが、私の側により一生懸命慰めてくれたのだ。

本来ならば、ただの鳴き声にしかな聞こえない声が、私には言葉に聞こえた。

『大丈夫だよ。待ってるから』って。

皆は、ただひたすら大丈夫だを連呼し、自分の体を私にすり寄せ慰

めてくれた。

それに、私は始めて知ったのだが、ポケモンはトレーナーでないと保持する事が出来ないのだ。

トレーナーの資格は、少し勉強すれば簡単に取れるものらしい。

そして、ばーちゃんが居ない今、この子達は野生のポケモンに戻る。

しかも、トレーナーの資格を取れたらある程度大人として認められるらしい。

ならば、此処に戻ってくることも可能となる。

戻って来れなくても、トレーナーの資格があればこの子達を連れていける。

だったら、ライモンシティに行つてトレーナーの資格を取ろう。

私は、そう決めた。

そう決めたけど、そう簡単に出発と言う訳にはいかなかった。

ばーちゃんの研究を、ばーちゃんの知り合いに預けないといけなかったし、その他諸々の処理があつた。

人が一人死んだら、現代でも大変だったもんなあ…。

そう言えば、今まで考えないようにしていたけれど、ザールブルグで私が死んだ後、どうなったんだろう？

アカデミー卒業後に自分で開いたアトリエは、私がもしもの時は妖精達に譲るってアイゼルには言っておいたけど。

私の調合法を誰よりも理解している子達に任せれば、アトリエは大丈夫だろう。

アスランとイヴァン、ジークおじさんには悪い事をしたなあと思っただけ。

あと、ギルにも悪い事をした。何度も求婚されたけど、どーしてもギルを恋愛対象として見れなかったんだよねえ。それを言うんだけど、好きな人がいない間は諦めないって宣言されちゃってたし。

私が死んだことで、新しい恋をしてくれたらいいけど…。

結局、冬一杯後始末にかかった。

そろそろ春が来るだろうと言う頃、私は赤い屋根の家の鍵を閉めた。門扉の鍵もきつちりの閉める。

私の横には、元ばーちゃんの持ちポケモン。

彼らは、これから楽園に戻る。

元々ばーちゃんは、楽園に放し飼いのようにしていたから、何も問題はないだろう。

今回、彼らがこの場にいるのは、私の見送りの為だ。前もって、今日出発するって事を言っておいたのだ。

まさか、通じているとは思わなかったけど。

「いってきます」

私は、僅かな荷物が入った鞆を背負い、ポケモン達に言った。

『いってらっしゃい』

『楽園』の『箱庭』を後にし、私は一路ライモンシティーへと向かったのだった。

はるばる来たぜライモンシティ

家から最寄の駅までは、お隣さんのポケモンに乗せて貰った。いや、歩いたら一日以上かかるので助かりました。

ホント、とんだ僻地だよなあ…。

駅から電車に乗り、そこから鈍行電車にゆられて6時間。何回か乗り換えて、ようやくライモンシティに到着した。

「ぐえっ」

私は降りてくる人々共に降りた。

最初は良かった。

乗る人も降りる人も少なかった。

けど、乗換えをするたびに、人数が増え…最後の乗換えをした頃には、昔会社に勤めていた頃の満員電車を髣髴させるような状態になった。

そうだよな。ザールブルグとは住んでいる人数が違う。

ザールブルグは、大体6000人ぐらいが住んでいたぐらいだからなあ。

しかも、それでも大都市だったんだ。

けど、このポケモン世界では全然違う。

さらにライモンシティには、全ての電車が終結すると言われている大きな駅だ。

当然使用する人の人数も大違いだった。

「き、気持ち悪い…」

しかも、虫ポケモンと違い匂いが凄かった。

香水とか付けていた人もいたし、食べ物匂い、整髪料 e t c。
電車の中は臭いのデパートだった。

そして、それはそーいう臭いになれていなかった私の鼻に直撃だった。

虫ポケモンは慣れたら、花の匂いや木の実の匂い等がして結構いい匂いなんだけどねー。

人間って、臭いや…。

ヨロヨロと人ごみを避けて、ホームの隅に座り込む。

さすがに、今の状況では動けない。

時計を見ると、まだ母さんとの約束の時間には余裕がある。

少しここで休んで、気分の悪さが回復したら階段を登って約束の場所に向かえばいい。

そう思って、休憩していたら頭上から声かけられた。

「大丈夫でございますか？ 気分でも悪いのでございましょうか？」

気持ち悪さのあまり俯いていた顔を、僅かに上げ、声をかけた人を見上げた。

「車掌、さん？」

車掌のような黒いコートを着た人だった。

その後ろには、同じデザインの白いコートを着た人がいた。

顔は逆光と目深に被った帽子のせいで、良く分からない。

「そうでございます。医務室へ参りましょう。ご案内いたします」

私は黒車掌の言葉に首を横に振る。

少し休めばなんとか動けそうなのだから、放っておいても大丈夫だ。

「……………失礼いたします」

私が立てないのが分かったのか、黒車掌が私の腕の脇に手を入れて抱き上げた。

ああ、お姫様抱っこでないのは嬉しいなあ…。

「クダリ、私は医務室に彼女を連れていきますので、荷物をお願いします」

「うん」

そう言うと、白車掌は私の足元にあつた荷物を持ち上げた。

少しだけ人の匂いに敏感になっていた私は、相手の匂いを想像して少し震えが走った。

けど、考えていた程臭くなかった。

むしろ、イイ匂いでした。

そもそも、そんなに匂いはしなかった。

やっぱり、電車の中の匂いはいろんな人の臭いが混じるから、別物だったのか？

私はゆらゆらと揺れる体の振動に、いつの間にか意識が薄くなって

いくのを感じた。
どうやら、思ったよりダメージが大きかった模様だ。

次に起きると、医務室でした。
医者らしき人が、

「大丈夫？」

と聞いてきたので、私は頷いた。
実際、電車に乗りなれない人が、満員電車で気分が悪くなることは
良くある事らしい。

少し寝たせいで、大分気分も良くなった。

「あの、私を連れてきてくれた人は……」

連れてきた人にお礼を言おうと、部屋の中を見回したが、私と医者
以外誰も居ない。

「ああ。あの2人は、今頃電車に乗っているわ」

ああ。勤務に戻ったのか。
お礼の一言ぐらい言いたかったなあ。わざわざ、抱き上げて運んで
くれたし。

あまり、重くは無かったとは思う。つーか、思いたい。

わざわざ運んでくれたのに、お礼の一つも言えなかったや。

私は溜息一つついて、運んでもらったバッグを手元に引き寄せた。

ああ、そー言えばいいものがあつたな。

私はバッグをゴソゴソと漁って、小さな袋に入ったクッキーらしきものを取り出した。

家で虫ポケモン達と一緒に食べるために作っていた、クッキーだ。モモンの実を細かく砕いて作ったクッキーだ。私のおやつにと思って持ってきた。

「あの、良かったらコレを私を運んでくれた人に渡してください」

「あら、クッキー？」

「はい。手作りですし、大したものじゃなくて申し訳ないですけど。あと、わざわざ運んでくれてありがとうございます、とお伝えいただければ……」

時計を確認すると、そろそろ約束の時間だ。一時間近く眠っていた計算になる。

「分かったわ。必ず渡すわね」

私は、頭を下げて医務室から出て行った。さて、母さんと約束した場所に行くか。

虫ポケケ対応クッキー（他のポケモンも対応しています）

ノボリとクダリは、医務室の管理人から一つの袋を差し出された。

マルチバトルを終えた二人の前に置かれた、小さな袋。

「ボス達、今日女の子を運んで来たでしょう？」

その子が、お礼と一緒にコレを渡してくれて言われたのよ。ありがとうございました、だそうです」

「うわー、なんだろう！」

クダリが、ノボリが止める間もなく袋を開く。

「うわ、クッキーだ！」

「クダリ！」

そして、そのままクダリが自分の口にクッキーを入れる。

このライモンシティの有名人の一人でもあるノボリ達には、当然プレゼントも多く届く。

大抵は普通のもののだが、中にはぶつとんだモノを入れる人もいる。

ノボリは、髪の毛が細かく編みこまれたセーターを見たときは、思わず鳥肌が立ったぐらいだ。

それから、プレゼントには過敏に反応するようになった。

特に食べ物は何が入っているかが分からないので、大半はゴミ箱行きだ。

「おいしー。この味、モモンかな？」

そんなノボリの気持ちも知らず、もぐもぐとクッキーを租借するクダリ。

「デンチュラも食べるかなあ……」

クダリが、自分の手持ちの一つであるデンチュラをモンスターポールから呼び出し、クッキーを見せる。

すると、デンチュラは甘えた鳴き声を上げ、クダリから見たいそう可愛らしくクッキーをねだった。

クダリが手のひらに乗せて差し出すと、ガツガツと凄い勢いで食べだした。

「凄いですね……」

デンチュラがまさしく食べるように食べる様子に、呆気に取られる三人。

あつと言つ間に食べ終えたデンチュラが、再度クダリにクッキーをねだりだす。

「ほら、ノボリも！」

そう言つて、クダリがノボリの手のひらにクッキーを一枚乗せる。ノボリは、おそろおそろクッキーを口にする。

「美味しい……」

程よい甘さで、とても美味しいクッキーだった。

クダリも、一枚口に入れる。

デンチュラが美味しそうに食べていたので、ノボリの手持ちポケモンも欲しくなったのか、ポケモンボールがかたかたと揺れた。

ノボリは、手持ちの一つであるシャンデラを出してやり、一枚与えてやる。

嬉しそうに食べるが、デンチュラ程ではない。

すると、ノボリのモンスターボールの中から、アイアントが飛び出してきた。

「アイアントも食べたいのでございましょうか？」

おそろおそろアイアントにあげると、デンチュラと同じように食べるようにして食べている。

「……………どうも、虫ポケモン用に調整されたお菓子みたいねえ……………」

サクラが医者だと思っていた人が、そう言った。

「これ、どこで売っているのかなー」

あまりの虫ポケモンの食べように、クダリが言った。

「ああ、これ手作りらしいですから、非売品ですよ。それにしても、凄いわね……………」

「それは、残念」

元々数があまり多くなかったクッキーは、あっという間に無くなっ

た。

ほとんどが、デンチュラとアイアントに食べられた感じだ。

満足した二体はポケモンボールの中へと戻っていった。

「そう言えば、タナカ女史の姿が見えませんでしたけど…」

タナカ女史とは、バトルと一般路線に別れているこのライモンシテイにおいて、両方の駅長を務める人物だ。

女の身で、一般路線とバトルのトップに立つ彼女は、まさしく女傑だった。

バトルに明け暮れる二人に代わり、書類の処理も担当してくれる。その代わり、バトルサブウェイの実務は2人に一任されるのだが。

ノボりはまだある程度書類の処理など自分ですが、クダリに至っては完全に頭の上がない女性だ。

「ああ、タナカ女史は、今日は早退です」

別の事務員が横から口を出した。

「仕事の鬼が珍しい」

「クダリ」

「だってー」

タナカの早退を教えてくれた女性が、

「娘さんのお迎えに行くそうです」

事務室の時間が止まった。

「は？」

「いや、だから娘さんのお迎えですよー。タナカ女史、既婚者ですよー。旦那さんはかなり昔に亡くなっていますけど、忘れ形見とも言える娘さんがいらっしやるんですよ。知りませんでした？」

「えー！ー！ー！ー！？」

クダリが素っ頓狂な声をあげた。

ノボリは煩いですね、と思いつつ脳裏には、タナカ女史が夜遅くまで残っている姿が思い浮かんだ。

子供がいるのに、あの勤務状態は正直ありえない。

「あー、聞いたことがあります。確か子供さんは旦那さんのお母さんと暮らされていて、その方が最近亡くなったんですよ。一ヶ月ぐらい前、電話があつてバタバタ帰った日があつたでしょう」

「ありましたね」

その日は、イッシュ地方でもかなり寒かった日だった。

「その日に亡くなったんですって。あ、クダリさん。だから、この書類よろしくお願いします」

「うわっ、なにこの量！？」

ドンと二人の前に積まれた書類の山。

正直、就業時間内に終わるかどうか疑問の量だ。

「2、3日子供の為に休暇届も出していましたし、一時の間忙しいですよー」

そう言えば、事務所が普段よりバタバタしている。
逃げようとするクダリを、ノボリが捕獲する。

「申し訳ございませんが、今日はどうやら逃がせないようですね」
「うわーん、タナカさん早く戻ってきてー！」

どうやら、今晚は家に帰れないようだ。

二度あることは？

私は、母さんに連れられてやったきた家の中に入り、思わずorz状態になった。

「えっと、昨日少しは片付けたのよねー」

腐海とまではいかないけれど（エリーの腐海作成能力は高かったなあ…）、見事に足の踏み場も無かった。

幸いなのは、台所が使った形跡がなかったので、シンクが汚れた形跡が無かったことか。

一体食事とかどうしていたんだ、この人…。

ばーちゃんが、育てられないって言った意味が良く分かった。

そー言えば、私の面倒もほとんど父さんが見ていたような気が…。

赤ちゃんの頃って、寝ている時間が多いからどーしても記憶が途切れ途切れになっているんだよね。

「えと、サクラちゃん？」

私がつづくままった状態のまま動かないので、心配した母さんがおろし始めた。

「雑巾、ホウキ、バケツ！」

「え？」

「今から掃除します。こんな家じゃ暮らせません！」

疲れてはいるけれど、こんな家じゃとてもじゃないけど暮らせない。

「は、はい！」

私の迫力に押された母さんが、掃除道具を発掘してくる。と、言っても引つ張り出したのはバケツと掃除機だった。あー、掃除機あつたんだー…。

「ゴミ袋。これ、全部要らないよね？」

コクコクと頷く母さんを尻目に、私は腐海一步手前の清掃作業に入った。

まずは洗濯物だな。あれは、洗濯機に任せればいいから、楽だわ。

ゴシゴシとリビングの掃除が終わったら、日付が変わっていた。飲まず食わずで掃除をすること6時間。ようやく、リビングだけでもなんとか住める状態になった。

チラリ覗いたけど、母さんの寝室も足の踏み場が無い。

「こっちが、サクラちゃんの部屋の予定なんだけど…。元々はアカツキさんの部屋だったの」

そう言っ通してくれたのは和室。

こっちは、少し埃が被ってはいるが、散らかつてはいない。

「あの人が亡くなってからそのままにしておいたの。家具とかは新しいのを買ってこようね」

「別にいいよ。買い換えたら寂しいでしょ？」

「……………ありがとう」

着替えてから、私と2人で部屋の掃除をした母さん。

最初に会った時は、いかにもキャリアウーマンって感じだとつつきにくい感じがあったけど、少し話してみたら気のいい人だった。

正直、付き合いが短すぎて母親とは思えないけど、共同生活はなんとかがやっていけそうだ。

ついでに、部屋の家具は和筆笥と炬燵だけだった。

「けど、サクラちゃんも年頃だから、鏡台とか必要でしょう?」

化粧ねえ…。

「虫ポケモン達が嫌がるから、化粧は簡単なスキンケアと日焼け止めぐらいしかしてなかったからなあ…」

途中で母さんが買ってきてくれた、コンビニのおにぎりをパクつきながら言う。

本当は簡単なものを作ろうと思ったけど、調理道具がほとんどないってどーいう状況よ。

シンクが使われていなかった理由が良く分かったわ。

飲み物とかどうしていたの?と聞くと、コンビニなんかの市販の飲み物しか買っていなかったそうだ。

「こー見えても、結構高給取りなのよ」

サブマスたちには負けるけどと、ボヤク母さんを尻目におにぎりを飲み込み、この後の事を考える。

「風呂はカビハイターをものすごくバラまいていたから、洗い流し

たら入れると思う。あと、明日は調理道具とか必要な物を買に行こう」

「あ、明日はサクラちゃんの学校の手続きをしようかと思っていたのだけど…」

「学校ねー」

ベコリと飲み終わった缶をつぶして、ゴミ箱に入れる。

「えっと、通信教育だったのよね？」

「さすがに楽園に子供は私しかいなかったし」

一応、日本と同じような義務教育制度がある。

まあ、多少違うのだが。

それは、後日話そうと思う。

そもそも、楽園には子供は私しかいなかった。

いるのは研究者や世捨て人のみ。

正直、あの楽園の環境は子供には向かないと思う。

娯楽っていったものがほとんどないし、ポケモンは虫ポケオンリー。

虫取り大好きの子供は喜ぶかもしれないが、楽園の森の中に下手に入ると生きて帰ってこれないらしいからなあ…。

ゆえに、人が滅多に入ることの出来ない虫の『楽園』となっているのだ。

「サクラちゃんが来るまでに、通信教育の成績を取り寄せただけど…」。サクラちゃんって頭良かったのねえ…」

そりゃあ、3回目の人生ですから。

特に数学に関しては、錬金術でも必要でしたから得意です。

日本ではどちらかと言うと、文系の方が得意だったんですけどね。

「けど、ポケモンの取り扱いの資格を一つも持っていなかったのは驚いたわ」

「いや、だっっていらなかったし」

そう、それだ。

今回、私が結局はライモンシティに出てくる羽目になった原因は。

ポケモンを所持するのには、トレーナーの資格が必要なのだ。

と、言っても一匹ぐらいなら数ヶ月の講習だけで済む。

実際大半が10歳までで初級のポケモン取り扱いの資格を取ってしまっ。

私は、ポケモンが周囲に当たり前に居る状況だったので、取っていなかったのだ。

むしろ、そーいう資格がある事自体知らなかったわ。

「だから、トレーナーの資格を取るのが一番だと思うの。お義母さんのポケモンを引き取りたいのでしょうか？」

その言葉にコクコクと頷く私。

「ばーちゃんが所持していたポケモンは、4匹。」

アイアント・クルミル・メブキジカ・ウルガモスだ。

仲間に入った順番は、上にあげた通りだ。

ウルガモスは、私が楽園に来てしばらくしてから仲間になった。

いやあ、ウルガモスが仲間になったってのが、私が関係するのよね。

まあ、今回はまったく関係ないから説明しないけどさ。

「うん」

「お義母さんのポケモンって、確か4匹よね？」

「だったら、やっぱりトレーナースクールに入るのが一番ね」

「トレーナースクール？」

「その名の通り、トレーナーの教育が受けれる学校よ。一匹だけ保
持できる資格は、簡単に取れるけどそれ以上だとちよつと勉強しな
いといけないのよ。ポケモンとの付き合い方とか、バトルの方法と
かね」

「バトル…」

楽園にも一応テレビはあった。

テレビの番組とかを見ても分かるのだが、ポケモンバトルと言うの
はこの世界の最も大きな娯楽だ。

地方ごとにリーグがあり、それぞれのリーグの視聴率は他の番組の
追隨を許さない程だ。

ちなみに、私はバトルには興味が無い。

いつも、楽園で私が景品の争奪バトル見ていたもんなあ…。

ああ、まだそんなに経っていないのに、楽園が恋しくなってきた。
ホームシックだなあ…。

買い物……主に生活用品

遠くを見て樂園を思い出している間も、話は続く。

「トレーナースクールの知り合いが居るから、ちょっと話してみたの。そうしたら、サクラちゃんの成績だったら問題ないって」

「あ、そーなの」

「そう。ポケモンのことは、おいおい覚えていけばいいのですって。ちょっと、大変になるけど」

トレーナースクールのクラスでも、レベルはピンからキリまでであるらしい。

私はその中でも下のクラスだ。

いや、資格が取ればいいから問題ないんだけどさ。

中には、エリートトレーナーを目指す人とか、ジムトレーナーを目指す人がいて、そーいう人ほど上のクラスを目指すものらしい。

私の知識は偏っていて、虫ポケモンの知識しかないんだよね。

虫ポケモンは異様にいたから、生態から技まで詳しいんだけどさー。

だって、私の争奪戦（以下略）。

「じゃあ、明日も早いからお風呂に入って休みましょうか。ベッドは……」

「いいよ。毛布があればどこでも眠れる」

実際、森の中でも平気で眠れる。

何度も野宿の経験があるし。

さすがに、楽園以外の森で寝ようとは思わないけど。

楽園は、私にとっては（命は）安全だ。

次の日、繭のくるまれているとかはあるけど。

「そー言う訳にはいかないわ。私のベッドを使ってちょうだい。母さんはソファで寝るし。あ、シーツはクリーニングに出しているから大丈夫よ」

そう言うので、ありがたくベッドを借りることにした。

そつだ。せつかくの畳の部屋なんだから、ベッドを置かずに布団にしよう。

ふふふ、久し振りの布団だわあ。

次の日、母さんの部屋を掃除して、簡単にはあるが自分の部屋も掃除してしまふ。

すると、あつと言う間に昼になって、それから買い物に出かけた。

私の必要であるつ身の回りの代物に、日用雑貨品、調理器具などだ。

調理器具なんてどこの家でもあると思っていたから、持ってこなかったんだよね。

鍋釜一式買わせていただきました。

あと、炊飯ジャーも発掘したけど、いつのものか分からないカビだらけのご飯が中に入ってたので、そのまま捨てました。

そして、新しい炊飯ジャーを購入。
最新式だよ、最新式。

包丁も、使うのは私なので、私の手に合うものを探していたら、母さんがオーダーにしようと言って、注文してしまいました。料理人でもないから、普通の鋼の包丁でいいのになあ…。

母さん曰く、「鋼の包丁なんて欲しがると人は、現在は少ないわよ。ステンレスとかが主流だし」との事。楽園では、普通に鋼使ってたけど…。手入れは面倒だけど、切れ味が全然違うのになあ。

その他にも必要なボールや、食料など色々買い揃えたら凄い荷物になったので、母さんが自分のポケモンを使って家に運んでいました。

母さんが出したポケモンは、ガントルと言う岩ポケモンだ。初めて見たな、岩ポケモンなんて。

そのガントルの背中に私達が買った商品を結びつけて、帰る。

母さんは、私の服とか化粧品とかも買ったけど、さすがこれ以上はガントルでも無理だろう。本気で色々買って、かなりの荷物になっていてガントルの背中にはもう乗りそうに無い。

壊れそうな品物は一応私達が持っているけど、それ以外は全部ガントルが持ってくれた。

「ありがとね。ガントル」

私がお礼を言つと、ガントルが何も問題ないよ、と言つた風情で返事をした。

うん、虫ポケモン以外は嫌悪感はあまりないな。

スクール訪問

買い物の次の日、私は母さんと一緒に地下鉄に乗ってトレーナーズクールに来ていた。

ライモンシティの地下鉄は、他のシティだけでなくライモンシティの全てを網羅していて、市民の日常の足となっていた。

「あ、コレを渡しておくわね」

そう言って、地下鉄に乗る前に母さんが一枚のカードを渡してくれた。

「サクラちゃんの市民証よ。これ一枚で買い物も出来るし、地下鉄も乗れるわ」

なんでも、銀行の口座と直結していて、これを一枚で身分証から財布まで全て兼任してくれるらしかった。

暗証番号はなく、個人の指紋による照会らしい。

うーん、銀行のカードとICカードと住基カードが合体したようなものか。

将来的にトレーナーの資格を取得したら、その情報も追加されるらしい。

それにしても、銀行の口座かあ…。

いくら入っているんだろう？

「楽園の住居の維持費は、別口の口座だからこれは純粋にサクラちゃんのお小遣いよ。毎月のお小遣いもこの中に入れるわね」

大きなお店では使えるけど、小さなお店では使えないところも多いらしいので、その場合は銀行で現金を引き出すらしい。

「あ、私は地下鉄に勤めているから、その特典で家族も地下鉄乗り放題なのよ。だから、地下鉄のお金は考えなくてもいいわよ」

良かったわねー、と笑う母さんの姿が眩しいよ。

そうか、母さんは地下鉄に勤務していたのか。

かくして、地下鉄に乗って私はトレーナースクールへと向かった。

トレーナースクールで簡単な試験をして（ポケモンのことなんて、虫ポケモンのことしか分からなかったわ）、クラスへと案内された。クラスの人数はそんなに多くなく、男子と女子の人数はほぼ一緒。今日は紹介だけなので、授業はまた後日となる。

休み時間だったので、クラスメイトと少しだけ話した。

皆、ポケモンボールを1個は持っていた。

私がポケモンを一体も所持していないと聞くと、驚いたようだった。どうやら、本当にかなり小さいうちに最初の資格を取得するらしいかった。

「一番最初の資格は一週間ぐらいで取れるわよー」

ケタケタと笑いながら、ツバメが言った。

ツバメは私の隣の席になった女の子だ。

年は私とほぼ一緒の15歳。

ちなみに、年齢的に言つと中学生ぐらいだ。

この世界には義務教育として、9年間勉強をしなければならぬ。それは、私が過去に受けたような勉強のほかはこの世界独特のポケモンの付き合い方の基礎まで学ばされる。中には、早い段階でトレーナーの資格を取得し、旅をしながら単位を取得していく方法もあるらしい。

なんでも、早くて10歳ぐらいでトレーナーの資格を取得出来るらしいので、その救済処置らしい。

私は旅なんてする予定はないので、ゆっくりと義務教育を消化中と言う訳だ。

ちなみに、トレーナースクールは義務教育もかねているので、義務教育は果たされていると考えられるらしい。なので、もう一つ学校に行くという手間は省かれる。

私は、トレーナースクールに通ったが、普通の学校に通う子も多いらしい。

そーいう子は、一体だけのポケモンを所持しているだけらしい。

「だから、最初の資格は子供と一緒に勉強をすることになるんだけどねー」

あはははと笑いながら、ツバメが言った。

7歳の子供と混じって勉強か。ヤバイ、なんかスゴイ情けなくなってきた…。

想像の中でチビッコ達に混じって勉強している自分の姿を想像して、思わず心の中で涙を流すのだった。

ライブキャスター手帳型

帰り間際、母さんと一緒に帰っていたら、母さんが、

「あ、ライブキャスターを買うのを忘れていたわ！」

と言い出した。

「ライブキャスター？」

「そう。あれがないと色々と不便だわ。ちょっと買いに行きましょう」

私を引っ張って、スクール近くの一軒の店に入った。

中には携帯のようなやつや、腕時計型、手帳型、などの様々な機械が展示されてあった。

「子供の為に、新しいライブキャスターが欲しいんですけどー」

母さんが店員にそう言うと、店員は私を見てから色々なライブキャスターを見せてくれた。

「トレーナーの方に人気があるのは、なんと言っても腕時計型ですね。完全防水性で、旅にもバッチリですよ。アプリも結構入るの
で問題ないです。拡張性が高いのは、やはり手帳型ですね。携帯型はその間の中間と言った感じですかね」

ちょっと説明をして貰ったのだが、どうもライブキャスターとは通信にポケモンの管理ソフトなど様々なアプリが追加できるスマートフォンのようなものらしい。

ポケモンの管理にも便利なので、トレーナーでなくても所持率が高いとのこと。

「簡単にポケモンの状態が分かりますからね」

そう言つて、店員さんが自分のライブキャスターを見せてくれた。店員さんのライブキャスターは、ピンク色の携帯型で中には所持している鳥型のポケモンの詳しいデータが表示されていた。

「サクラちゃんはトレーナーを指すのだから、やっぱり腕時計型よねえ……」

そう言われたので、腕時計型を見てみるのだがなんとピンとくるものがない。生まれ変わる前から、アウトドア派じゃない私は、あまり旅と言われてピンとくるものはない。

色々を見たが、結局小さめの手帳型に落ち着いた。一番データが入るらしいし。色は夕焼けのような赤。そう、昔の私の髪の色だ。

母さんが店員と手続きをしている間、私はガラス越しに外を眺めていた。

皆様々なポケモンを連れていたり、すぐに取れるところにポケモンボールを見て取れた。

本当にポケモンが生活に深く浸透しているんだなあ……。

手続きが終わり、私の手にライブキャスターがやってきた。私はそのライブキャスターを持っていた鞆の中に入れた。

ちなみに、ちょっとだけ覗いたら、母さんのライブキャスターの番号が一番上に登録されてあった。
二番目はスクールの電話番号。

簡単な使い方を教えてもらい、私と母さんは店を後にした。

せっかくだから外で食事をしようという事になって、嬉しそうな母さんと地下鉄に乗ろうとしたら、母さんのライブキャスターが着信を知らせてきた。

携帯型のライブキャスターを一瞥した母さんは、嫌そうに顔を顰める。

横から覗き込むと、クラウドと表示されている。

「母さん、出なくていいの？」

私の言葉に母さんは、本当に嫌そうに通信に応じた。

「タナカ女史、仕事が全然終わらんわ！」

休暇なのは分かつとーけど、このままじゃ地下鉄の運営に支障が出るわー！！」

車両の修理もままなりませんー！と悲鳴のような報告をあげてくる。どうもライブキャスターは映像も映る様で、背後には大量の書類を相手にバタバタしている方々の姿が。

「私、今日まで休暇中なのよねー。上下線使いなさいよ。とくに、上は問題ないでしょ」

「し、下の方が無理やっちゅーねん。って言うか、2人ともバトルいっとなるって」

「ちっ、使えない双子め。今、外出中だから、少し時間かかるわよ」

「えーわえーわ。すまん、本当にすまん！」

頭を下げる緑色の服を着た鉄道員を尻目に、母さんはライブキャスターの通信を切った。

「残念だけど、どうやら一緒に食事は無理になったわ」

「うん。分かった。夕飯は家で食べるわよね？」

「絶対帰ってくるわ。サクラちゃんのご飯おいしいもん」

イイ年した大人が「もん」はやめて欲しいものである。

「サクラちゃん、地下鉄で下に降りちゃ駄目よ。サクラちゃんが穢れちゃうからねーっ！」

と、手をブンブンと振って意味不明な事を喚いた母さんと駅で別れた。

私は、ライモンシティ中央駅であるギアステーションに戻ると、近くのスーパーに買い物に出かけた。

スクールの荷物は、母さんがハトーポーに頼んで家のベランダに運んでもらうようにした。

昨日は、荷物が多すぎて持てなくなっただよねえ…。

私は今日と明日の分の食糧を買い込み、家へと戻っていたら花屋に目がいった。

「あ、木の実が売ってる」

店先には数種類の木の実が売っていた。

「クラブ・カーゴ・モモン・チーゴ・ナナシかぁ…。基本的な味の木の実は揃ってるなあ」

私は一応ポフィン鍋を所持している。

イツシユ地方では作られることのほとんどないポフィンは、シンオウ地方発祥のお菓子だ。

別の地域ではポロックとか言うお菓子があるらしいが、詳しくは知らない。

木の実をポフィン鍋と言う専用の鍋で調理したお菓子だ。

楽園の子達の大好物だったりする。

木の実に対応して味が変わるのだが、なかなか奥が深いと思う。

「確か残りの木の実も少なかつたなあ。少し買って帰ろう」

私は店に入り、木の実を少しだが買って帰った。

実は、ポフィンじゃなくて普通に調理する事が出来るんだよね。自分用に作ったクッキーは、ポケモン達にも大人気だ。

少しだけ買った木の実をも買い物袋に入れて、今度こそ私は家路についた。

今日はキャベツが安かったから、ロールキャベツにしよう。

それだったら、母さんが遅くなっても作ったのを温めて食べられるからすぐに食べれるし。

後は野菜サラダだ。せっかくだから、買った木の実をアクセントに少し入れようかなあ…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5529x/>

元錬金術士、二度目を経験する

2011年10月22日00時14分発行